

# 前導者と記録者、 東西二界の間にて

—ニューヨークタイムズの邵氏の文に駁す—

## 目次

- 1 はじめに
- 2 航行史略説
- 3 中外の界は清の領外
- 4 東中西外
- 5 後山大洋の北
- 6 日清の和約
- 7 終りに

## 1 はじめに

平成24(2012)年9月19日、ニューヨークタイムズのネット頁内の著名記者クリストフ氏のブログに、台湾の邵漢儀氏の文章一篇が掲載された。題目は「尖閣(釣魚)列島の背後の不都合な真相」である<sup>1</sup>。この掲載は台湾の1個人の主張の肩を持つもので、日本の駐ニューヨーク領事館川村泰久首席領事がブログの下方に投稿して反駁するに至った。そして首席領事が投稿したことが更に反響を生み、各大メディアに報道された。

邵漢儀氏は、主に甲午年(明治27(1894)年)の日清の役以後の公法問題を論ずるが、基づくのは逆に全て甲午以前の史料ばかりである。甲午以前の釣魚島はすでに清の領土だったとして、日本の領土編入は「奪った」のだと主張する。彼の主張に新意は無く、40年あまり前からのチャイナ側の説と同じである。甲午年以前に清の領土でなければ、それだけで攻めずして破れる。このたびはニューヨークタイムズの盛名により反

1 原題は「The Inconvenient Truth Behind the Diaoyu/Senkaku Islands」、アドレスは <http://kristof.blogs.nytimes.com/2012/09/19/> (平成25年2月24日確認。)



いしむ のぞむ  
(長崎純心大学 准教授)

響が起きたに過ぎない。以下、甲午以前の漢文史料だけを取り上げて邵氏の主張に反駁する。

## 2 航行史略説

はじめにこの海域の航行史を略述しよう。釣魚列島の最古の史料は明の陳侃の『使琉球録』である。書中の航路に釣魚嶼の名を載せるため、チャイナ側は明人が最も早く釣魚島を見つけたと主張する。しかし忘れてならないのは陳侃の出航前の「三喜」である。一喜は琉球の朝貢船が入港し、琉球情報問合せが可能となったこと。二喜は琉球の接封船が入港し、前導をしてくれること。三喜は琉球が1名の針路役および30名の水夫を派遣して同船協力し、渡航可能となったことである<sup>2</sup>。陳侃はもともと未知の航路を心配して不安だったが、琉球人の同航で渡海可能となったのでこの三大喜に至ったのである。彼が琉球人の助力の下に記録した釣魚嶼は、誰が最も早く見つけたのか。琉球人が早くから見つけ、漢文で命名したものと推測せざるを得ず、陳侃は記録者に過ぎない<sup>3</sup>。釣魚嶼すらも知らなければ、針路役をできる筈もない。

陳侃以下、釣魚列島を最も熟知するのは琉球人であったことを、歴代の使録(遣使記録)は示す。福州から出航する時は福建人が針路役をすることが多いが、台湾島の北端に到達する以前に早くも琉球人と交替することを、汪楫・徐葆光・李鼎元の計3使節が記録する<sup>4</sup>。逆に福建人が一貫して琉球界まで針路役をした記録は1度も無い。これだけでも釣魚列島海域に於ける琉球人の熟練の程が分かる。更に陳侃の使録及び茅瑞徵『皇明象胥録』では、琉球人が針路役をしたとだけ記録する<sup>5</sup>。これは出航から終始琉球人が針路を導いたとも見える。

しかし琉球は弱小であったから、往々明清の人が琉球の歴史と文化を

2 原文は拙著『尖閣釣魚列島漢文史料』、長崎純心大学比較文化研究所、平成24年、14ページ。  
3 陳侃三喜についてはつとに定説がある。奥原敏雄「動かぬ尖閣列島の日本領有権」、所載誌『日本及日本人』第1515期、J&Jコーポレーション、昭和48年、68ページ。  
4 汪楫については下述。徐・李の原文は前掲書(註2)、134および184ページ。  
5 陳侃使録の末に附する題奏に曰く、「海道往來、皆頼夷人爲之用」〔海道の往來は皆な夷人のこれが用を爲すに頼る〕と。今『使琉球録三種』による、大通書局昭和59年活印本、49ページ。茅瑞徵『皇明象胥録』巻一「琉球」に曰く、「其國屆期遣看針通事一人并水手來與偕、密室看針。」〔其の國は期に屆くや看針通事一人及び水手を遣はして來たり與に偕にし、密室に針を看しむ〕と。華文書局據崇禎刊本影印、昭和43年、92ページ。

記録した。丁度スペイン人がマヤ・インカの文化を記録したと同じく、ある1つの文化現象が土着のものであるか否か、仔細に見極める必要がある。スペイン人の史料だからといってすぐにスペイン人の創造だと看做すのは誤りである。以上述べたことは公法に涉らず、邵氏も論及しないが、文化的背景として考慮する必要がある。

### 3 中外の界は清の領外

邵漢儀氏の引く甲午以前の漢文史料は2つ有る。1つは康熙23(貞享元年)の汪楫『使琉球雜録』、いま1つは清の後期の『重纂福建通志』である。汪楫の使録に曰く、

薄暮過郊(或作溝)、風濤大作。……問、「郊之義何取。」曰、「中外之界也。」  
「界、於何辨。」曰、「懸揣耳。然頃者恰當其處、非臆度也。」  
〔薄暮に郊を過ぐ(或は溝に作る)。風濤大いにおこる。……問ふ、「郊の義は何にか取る」と。曰く「中外の界なり」と。「界は何に於いてか辨ず(見極める)」と。曰く、「懸揣(推定)するのみ。然れども頃者(先頃)あたかも其の處に當る(その場所でした)、臆度(臆測)にあらざるなり<sup>6)</sup>〕

と。よく見れば「中外の界」は船中の某人の臆測の語であり、汪楫はこれ以前に中外の界が有ると知らなかったのである。では船中で誰が汪楫にこの情報を告げ得たのか。それは琉球人だと推測できる。汪楫のこの渡航は、歴代の使節行と同じく琉球人が案内した。且つこの時は特別で、船が台湾島の北端に到達する前に、琉球人は東北方向に航行すべきだと主張し、福建人は東南に進むべきだとし、汪楫は福建人の主張を容れた。その結果次第に台湾島の南部方面に近づく虞れが出てきた。この時正に康熙22(天和3)年6月、澎湖海域は清と鄭氏朝とのいくさの最中であり、船が南に近づいては危ないのである。汪楫は夢に預言を得て未明に目醒めると、急ぎ舵を切って琉球人の主張する東北方向に航行せよと福建人に命じ、身命の危機を脱した。現に汪楫『使琉球雜録』の原文に歴々と書いてある<sup>7)</sup>。その先の釣魚島航路は琉球人の手中に掌

6 原文は前掲書(註2)、123～125ページ。  
7 原文は前掲書(註2)、116～121ページ。

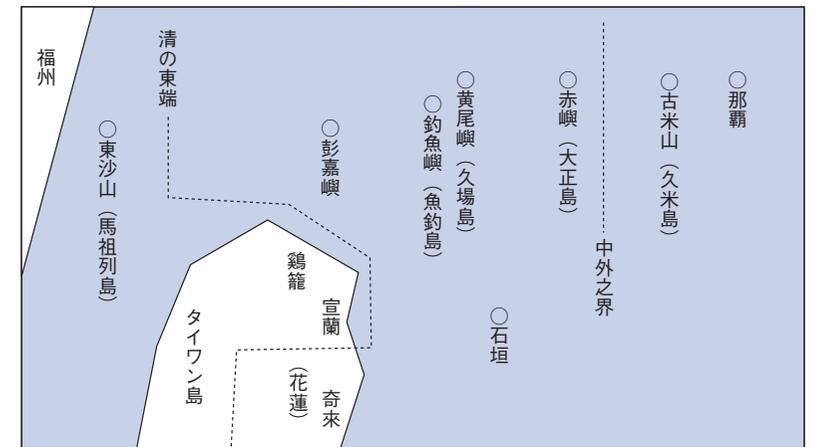
握され、「中外の界」は琉球人の語だったと分かる。汪楫は更に、歴代の使節の10人に9人が誤って東北方向に航行したと批判する<sup>8)</sup>。これは過去の使節も琉球人に頼り切りだったことを逆に示す。

邵氏は「中外の界」がチャイナと外との間の界線だとするが、正しくない。中外の原義は内外であり、原文には領土の内外と明示されない。汪楫の詩集『觀海集』に曰く、

「過東沙山、是閩山盡處。」〔東沙山を過ぐれば是れ閩山の盡くる處(福建の終り)なり<sup>9)</sup>〕

と。閩山とは福建省の陸地である。東沙山は今の馬祖列島中の1島である<sup>10)</sup>。汪楫の東渡は丁度澎湖海域のいくさの時であり、台湾島は未だ領土に入らず、省を設置したわけでもない。福建省が終れば冊封地および無主地だけしか無い。されば汪楫の認識する航路上の清の東限は台湾島の西北側の東沙山であり、釣魚島及び「中外の界」はともに遠く清の領外に在る。邵氏の説は通じない。

尖閣海域の概念



(筆者作成)

8 詳しくは拙著「尖閣釣魚列島雜説四首・順風相送は琉球人の航路だった」、『純心人文研究』第19号、長崎純心大学、平成25年3月。

9 原文は前掲書(註2)、130ページ。

10 何孟興氏によれば東沙山の現在地には二説有る。一説に今の東宮島を指し、一説に今の東沙島を指す。ともに現今の馬祖列島中の一島である。このうち東宮島は「東沙宮倭」を以て著名である。日本の使節明石道友が明の沈有容を助けて倭寇を捕獲した事件である。何孟興「明代福州海防要地竿塘山之研究」、『止善』第7期、朝陽科技大學通識教育中心、平成21年12月。